

名誉会員 小野 勝次

私は、ORの専門家ではありませんが、OR学会には多少とも関与している者です。オペレーションズリサーチ1994年2月号をお送りくださったので、頁をめくっているうちに、心配していたことが、現実になってしまっているようで、いたたまれず、筆をとる次第です。

私は、数学科出身ですが、学生時代は下手なスポーツに明け暮れていたばかりでなく、自分かつて、哲学や、理論経済学などの講義を聞きかじり、いろいろな学部の方先生方とも親しくしていただきました。講義はすべて、聞きっぱなしで、ノートをとって勉強したことなどない全くの落ちこぼれの数学科出です。

こんな私でも、一般の企業経営者よりは、いくらか、ORの話がわかるのではないのでしょうか。難しいORの特殊用語や、複雑な数式にしても、一般の経営者よりは、近づきやすいのではないのでしょうか。そんな私ですが、読みっぱなしながらも前述OR誌上の梅沢豊さんの論説は、2つとも通読しました。

「OR不振の原因と躍進の方策」の方は、引用文献などもあって、完全に理解したなどとは申しませんが意図されるところは、はっきりわかったつもりです。

しかし、OR誌上（この巻に限らず）の多くの論説は、決してOR専門外の人にわかりやすいとは思いません。専門用語も、素人には、巧みな解説でもない限り、隠語とさえ受けとられかねません。今の経営者たちも、あれらの話についてゆけるものとは私には思われません。これは、採否を決断したり、参考にしたりする以前の問題でしょう。

数十年も昔の話ですが、私の経験の一例を挙げて、ご参考に供します。当時の経営者のなかで、成功した人々は、それぞれなりに、鋭い勘をもっていたと思います。大学の先生方とおつき合いにしても、何かのきっかけで「大したものだな」と気に入ったことがあって、はじめて親しくなったように思います。

当時のORでは、「勘の合理化」を売りものにしていました。私のような素人に対してまでも、いろいろな方々から、ずいぶん聞かれたものです。彼らがいかに、勘の合理化に魅力を感じていたかが、よく分かります。「どんなことに対する勘ですか」と聞きますと、「われわれは商人だから、当然、最高の利を追いきたいのですよ」ということでした。今でいう最適化ということでしょう。私

「読者の声」欄にご投稿を

「オペレーションズ・リサーチ」のご愛読ありがとうございます。編集委員会ではORやOR誌に関する意見・異見・アイデアなどをお寄せいただき、多少ともディスカッションの場が広がることをねらい、この欄を設けました。皆様とのコミュニケーションをはかりながら、OR誌の内容をゆたかにできればと願っております。

原稿の長さは、標準的には1000字程度、最大限2000字以内（刷り上がり1ページ）とします。

ご投稿いただきました原稿の採否については、編集委員会で読ませていただいたうへにご連絡いたします。（機関誌編集委員会）

は悪戯っぽく、「あなたがたが追求する利とは、明日の利ですか、1年先の利ですか、それとも10年などという長い目で見た利ですか?」と聞き返しますと、「長い目で見た利を追求する」ということでした。

そこで、私は、いろいろな例を挙げて、長い目でみた利ということが、よくわからないことであることを、できるだけ詳しく説明し、何とか理解してもらったように思っています。

ORでもずいぶん、いろいろな意味での「最適化」が求められています。しかし、一般には、「最適化」の意味は、はっきりしていません。だから、よほど「最適化」の意味を、それぞれの場合にはっきりさせた上でなければ、私には、最適化を振りまわす勇気がありません。

ORでも、ずいぶんいろいろな意味で、あっさり「最適化」という用語を使っていると思います。経営者もいずれは「最適化」の一語では、危ないことに気づくでしょう。経営者の「最適化」ばなれば、OR的に考えれば、まことに当然なことではないでしょうか。

私としては、多くの特殊用語や数式などで、いかめしく飾りたてた論文形式などを避けて、解説的に

- (1) こんなところまで考え進むことができたが、その先にはこんな問題を残している。
- (2) こんな失敗をやってしまったが、それによって、こんなことがわかった。

などというような話を率直に述べた方が、経営者たちにとっても参考になるのではなからうかと思っています。思いつくままに。